

第 5 章

有珠山が噴火したら

5.1

火山防災の情報

有珠山の噴火の危険が近づいた時には、皆さんの安全を守るため、役場から様々な情報が伝えられます。また役場では、噴火に備え、防災の計画をあらかじめつくっています。

出演	
防災職員	まぐま君
町長	有太
如事	珠美
その他	町内の皆さん

火山防災情報の流れ



有珠山の異常はすぐに報道機関や行政に伝えられ、国や地方自治体でそれぞれ災害対策本部が設置されます







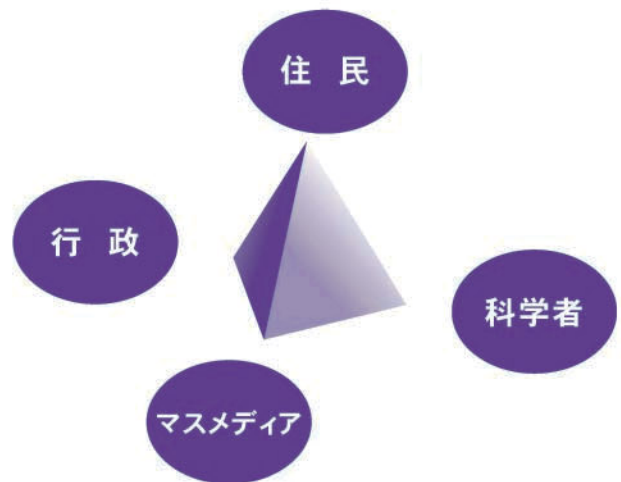
「自主避難」・「避難勧告」・「避難指示」

有珠山で、火山についての異常が観測された場合には、気象台から火山情報が発表され、市町村の役場や報道機関などを通して、住民の方々に伝えられます。火山情報を受けた市町村の役場の人たちは、噴火する可能性があると考えられる場合には、登山禁止などの規制を行ったり、住民の方々を守るため、避難経路の確保や避難施設などの準備を始めます。さらに、大規模な噴火の可能性が高く、避難する必要がある場合には、市町村長は、住民などに対して自発的な避難（自主避難）を呼びかけたり、避難勧告や避難指示を行います。

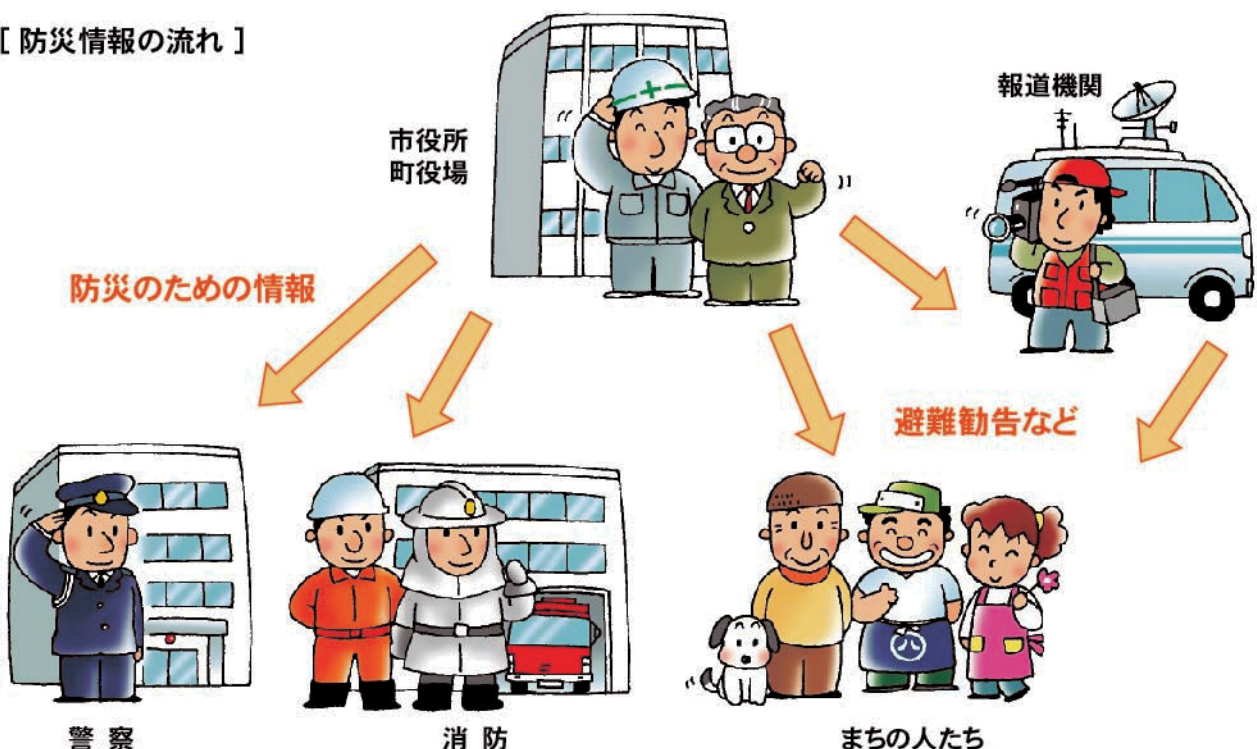
避難勧告は、避難をうながすもので、避難指示は、これを受けた全住民が早急に避難しなければならない避難の命令です。また、市町村長は、危険な地域への立ち入りの制限や禁止をすることがあり、これを警戒区域と言います。

避難指示などは、市町村の広報車や防災無線などを通じて連絡されるほか、テレビやラジオなどを通じて伝えられます。防災無線は、屋外スピーカーやそれぞれの家に設置されています。こうした指示などを聞いたら、隣近所に声をかけ合い、一緒に避難しましょう。また、火山噴火の時には、様々なデマやうわさも流れることがあります。

根拠のない情報に惑わされることなく、気象台や役場などが発表する情報に基づいて、行動することが大切です。



【防災情報の流れ】



有珠山は、噴火の危険が近づいていることが、事前に分かる可能性の高い火山です。有珠山では、噴火の前には地震が多く起こることが知られているからです。

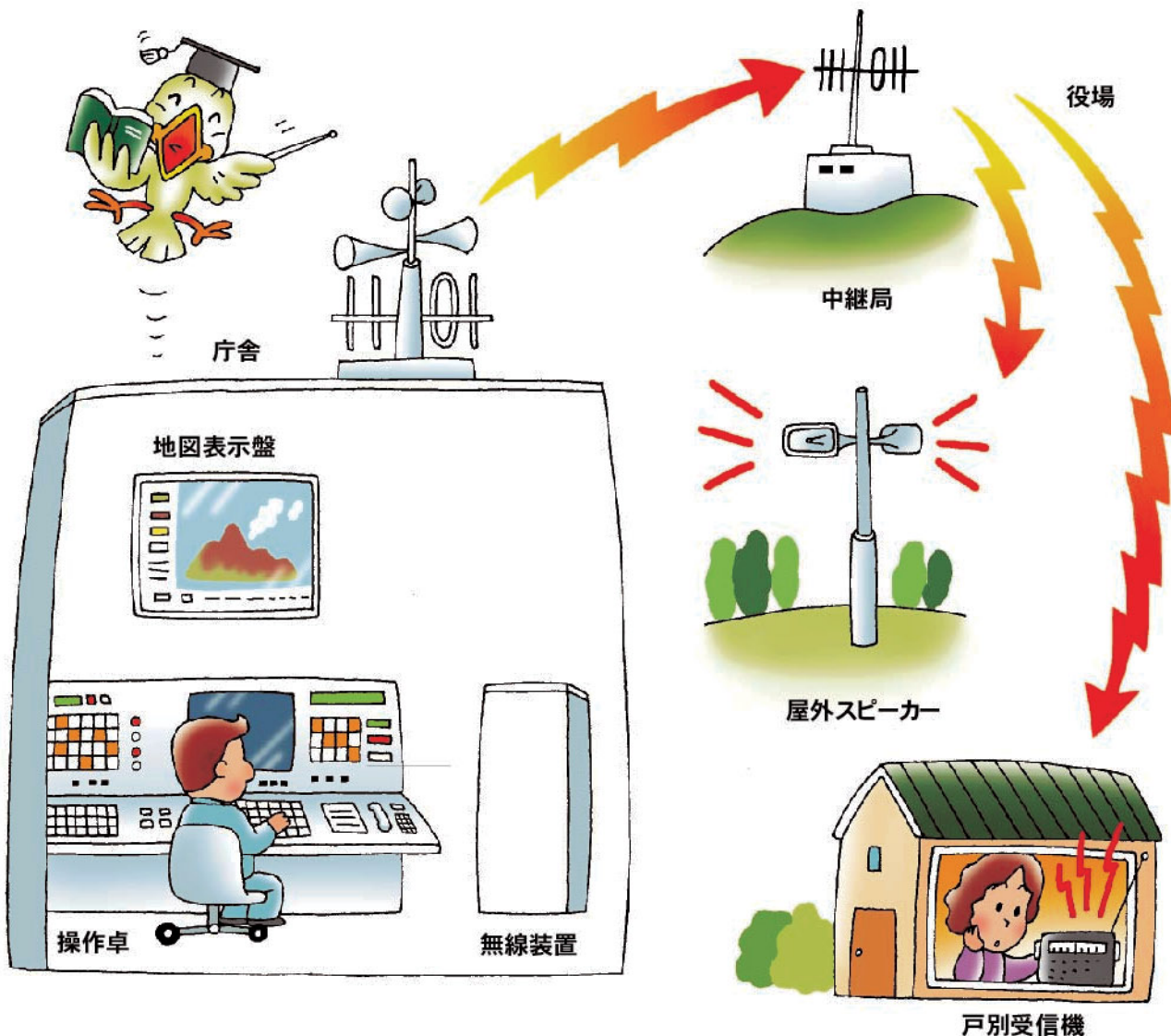
防災計画

伊達市・虻田町・壮瞥町では、有珠山が噴火した場合にどのように対応するかについて、あらかじめ計画を立てています。こうした市町村ごとにつくった計画のほかに、3市町が協力して取り組む内容を記した計画もあります。

これらの防災計画は、いざ噴火という時に、役場の人々が慌てることなく取り組めるように準備されています。例えば、避難所や食料を用意する方法などについても書かれています。さらに防災計画では、常日ごろからの噴火に

備えて準備しておく事柄や、火山災害に強いまちをつくるための方針についても記されています。防災計画では、有珠山をよく知ることが、とても重要だとうたっています。

こうした防災活動の拠点として、伊達市に、消防・防災センターが2003年に開設されました。普段は、体験学習や防災展示に活用されていますが、災害発生時には災害対策本部になります。



5.2

避難の心得

市町村から、噴火の危険があるので、避難するように伝えられた時には、避難する必要があります。また、地震の頻発などで危険を感じたならば、早めに避難してもよいでしょう。避難する時には、いくつか気をつけることがあります。

避難の前に

- 有珠山は、地震が頻発すると必ず噴火してきた火山です。地震が起こり始めたら、避難の準備を始めましょう。
- 避難の準備とともに、噴火の間、家をあけたり仕事を休んだりしても被害が少なくなるような工夫をしましょう。避難をしぶって何の用意もせず、噴火してから慌てて避難すると、かえって被害が大きくなってしまふ恐れがあります。
- 地震が始まったら、噴火することを覚悟して、家や仕事の被害を最小限に食い止める作業を始めた方がよいでしょう。
- 有珠山の噴火は、1日や2日で終わりません。ですから、避難した先で、長いあいだ過ごせる用意をして避難しましょう。



※非常袋などは、いつでも持ち出せる場所に備えておきましょう。

【持ち出し品】

応急医療品



貴重品



食料品・飲料品



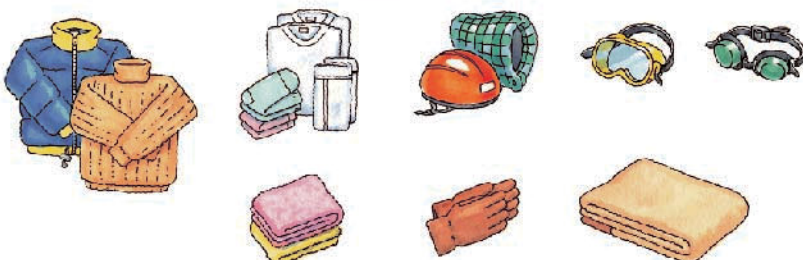
その他



お年寄りがいる家庭



衣類



赤ちゃんがいる家庭



- ペットは避難所に連れて行けないので、噴火の恐れのできた時には、早めに遠くに住んでいる親戚やお友達に預かってもらうように頼む必要があります。
- 家族のことを考えて持っていくものを決めましょう。例えば、お年寄りのいるお宅では、常備薬や看護用品も携帯するとよいでしょう。
- どこを通過してどこへ避難するのか、その時々をの情報をしっかり聞いて判断しまし

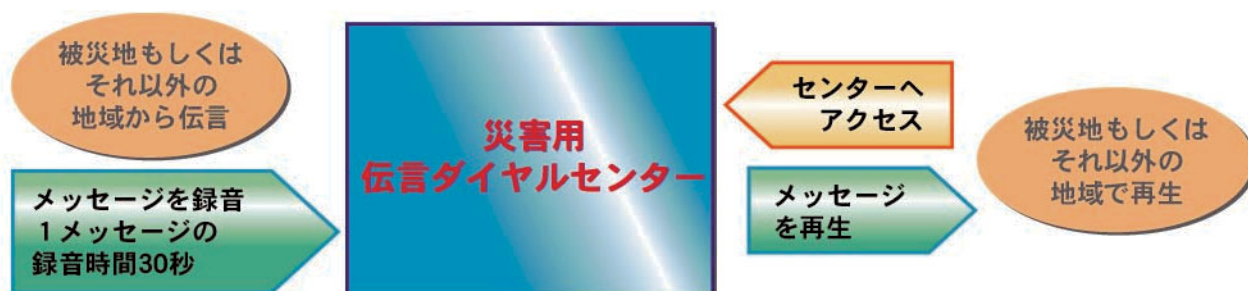
よう。また、日ごろから火山防災マップを見て、噴火の時に危ない所を知っておくことも重要です。



避難する時

- 避難する時には、電気のブレーカーをおとし、ガス・灯油・水道の元栓を閉めてから、戸締りをして家を出ましょう。
- 家の周りの人たちに声をかけ合って避難しましょう。特に、近所のお年寄りや体の不自由な人に注意を呼びかけ、避難の手助けをすることを心がけましょう。
- 火山灰が降ると、昼でも夜のように暗くなって不安になることがあります。しかし、少量の火山灰であれば、体にかぶったとしても危険はありません。避難所に避難する時は、できるだけ市町村が用意した車などを利用するようにしましょう。
- 火山防災マップで、火砕流・火砕サージや泥流の危険が想定される範囲内にある避難所は安全ではありません。避難の際に一時的な集合場所として利用する場合があっても、長いあいだ避難していることはできません。
- 噴火が始まると、多くの人がいっせいに電話をかけるため、電話がかかりにくくなります。家庭にある電話も、携帯電話もつながりにくくなります。
- 親戚の家などに避難した場合は、落ち着いたら、役場にどこへ避難したかを知らせましょう。
- 遠くの親戚などに、避難した場所を知らせる方法としては、災害伝言ダイヤル(171番)を利用するようにしましょう。

[災害伝言ダイヤルの仕組み]



5.3

避難先での生活

2000年噴火の際には、多くの人々が家から避難をしました。噴火直後には、約1万6千人もの人が、避難所や親戚などの家に移り住みました。

避難所

噴火が始まった時は春休みだったため、学校が避難所になりました。それ以外にも、スポーツセンターやコミュニティセンターなど、公共施設へ避難が行われました。避難が長引くと、学校は避難所としては使えなくなりましたが、その他の公共施設は、その後も避難所として利用されました。避難所での暮らしでは、食事の時間や場所、トイレなども一緒に共同生活です。みんなで、お互いに迷惑をかけないためのルールを決めたり、もっと暮らしやすくなるような工夫をしたりして、協力して暮らしていました。

また、避難所に避難していた高校バレー部員たちは、一緒に避難している人たちのために、いろいろな活動をしました。例えば、朝、トイレや大広間の清掃をすることにしました。また、運動不足になりがちな避難所のおじいさんやおばあさんに、簡単なストレッチや肩もみをしました。こうした活動は、多くの人たちに喜ばれました。



食事のために並ぶ避難した人たち



避難所

仮設住宅

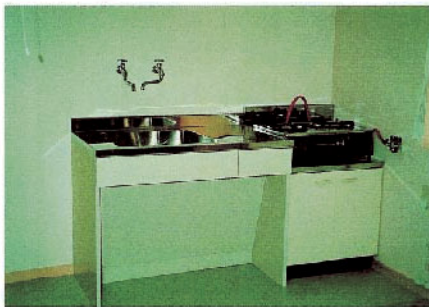


車椅子でも出入りできるようにスロープのついている仮設住宅

2000年噴火の際には、2千人を超える人が、避難所から仮設住宅に移り生活していました。仮設住宅には、避難所と違い、各戸に食事をつくる台所やトイレがついています。

仮設住宅の中には、足が弱^{くるまいす}って車椅子で暮らしている人でも、生活しやすいように工夫された仮設住宅もありました。玄関まで手すりのついたスロープを設け、簡単に家に入れるようにしました。また、台所は流しの下に

くぼみをつくり、車椅子の人でも使いやすいようにしました。お年寄りの方のための工夫は他にもあり、トイレには手すりがついていました。また、中で動きやすく、介護の人と一緒に入れるようにと、トイレは大きめにつくられました。そして、部屋の入口には段差をなくして、車椅子の人でも簡単に入れるようにしました。



車椅子の人でも調理できるキッチン



手すりのついているトイレ



神戸新聞での紹介記事

以前の仮設住宅には、こうした工夫があまりありませんでした。阪神淡路大震災^{はんしんあわじだいしんさい}のころの仮設住宅には、入口に段差が30cmもあって、お年寄りにとっては住みにくい仮設住宅もありました。当時、こうしたお年寄りの苦勞を新聞などで知った関西の中学生たちが、お年寄りたちの手助けをしました。この段差をな

くすために、高さ15cmほどの踏み台を技術の授業でつくって、仮設住宅のお年寄りたちに贈ったのです。この活動には、関西の30近い中学校の生徒たちが参加し、千個を超える踏み台を製作しました。その後、子どもたちとお年寄りたちの交流が始まり、お年寄りたちを卒業式に招いた中学校もありました。



踏み台製作



親戚宅などへの避難

人々が避難した場所は、避難所や仮設住宅ばかりではありません。遠くの親戚の所へ避難した人たちや、アパートを新しく借りた人たちもいました。こうした遠くの人たちには、避難所の人たちに比べて情報が届きにくかつ

たと言われています。

しかし、将来の噴火の時には、インターネットなどで、より早く情報が伝えられるようになるかもしれません。

有 中学生新聞

珠

2003 まぐま新聞社 特別号



二〇〇〇年噴火。いま、有珠山の動きはそしてまちの人々は

二〇〇〇年（平成十二年）三月三十一日十三時七分頃、有珠山が噴火しました。

前回の噴火は一九七七年（昭和五十二年）のことで、当時は、死者や行方不明者が出るなど、周辺地域に甚大な被害をもたらしました。この噴火によって被った悲しい出来事は、二三年間の間に人びとの間で語り継がれていきました。そして人びとは、その思いを胸に刻みながら火山とともに生きて来たのです。

— 今回、噴火する前の様子はどうだったのでしょうか。

二七日から火山性地震が頻発していました。近辺の住民で、二一日頃からカラスの様子がおかしいと気づいた方もいたようです。さらに通常一日一回あるかないかの火山性地震が午後三時までに十回近く観測されていました。有珠山の噴火の周期はだいたい三十年とされてきたため、「まだ早いのではないかと」まさかの噴火？」との心配もありました。しかし夜になるにつれ、山はさらに活発になっていきました。そして、二八日の日付が変わるとともに「火山観測情報」

第一号が出され、「数日以内に噴火の可能性大」と気象台が発表しました。一般国道、道央自動車道も通行止めとなり、JRも（東室蘭〜長万部）運転を見合わせました。三〇日には一万一千人が避難、不安と不眠で避難所には体調不良を訴える人も出始めました。そして、長い長い三日間のうち、ズドーンという地響きが起こり、約二時間後、きこ雲状の噴煙が急速に大きくなっていききました。有珠山二十三年ぶりの噴火でした。

— 地震と噴火の関係は？

有珠山は、粘性の高いマグマが動き出すと、地殻と摩擦を起こし、必ず地震を発生させます。過去七回の噴火でもそうでした。

— 噴火三日前から

二九日、ひととき大きな地震が有珠山周辺で発生しました。午前九時頃にはマグニチュード3.5の地震でした。前回の噴火時の前兆地震の規模はマグニチュード3.7でした。このくらいから、「いつ噴火してもおかしくない」状態でした。それからまもなく緊急火山情報

が出ています。前回の噴火によって学んだ防災への備えが十分に生かされ、突然の有珠山噴火という事態にも、あわてることなく対処することができました。

— 今後の噴火に備えてどんな事が重要ですか。また住民や観光について

やはり今回の噴火においても、地域社会に大きな打撃を与えたことは言うまでもありません。この災害を通して人びとは、地域で暮らしていく以上、火山と共生していくという考えが必要なることを、あらためて知る機会となりました。

— 今回被害が少なかったのは？

一つは、噴火予知が的中し、一人の犠牲者を出すこともなく一万六千人もの避難が行われた事でした。気象庁さらにはメディアの前で予測を発表した事が大きいとされています。世界にも例がないと、ある研究者も言い切っています。もう一つは、一九九五年に全戸配布されたハザードマップの効果も大きいとされ

が引かれ、トイレも設置されるなど現在も整備が進められ、沢山の観光客が訪れるようになりました。また各市町村の連携によるエコミュージアム構想が進められ、ワークシヨップを開催し、住民の方々と共にまちづくりについて話し合われています。

また有珠山を知る学習素材として、小学生版の副読本も作成されました（二〇〇三年三月完成）。地元現職の

先生方を中心に検討委員会が開かれ、拡大ワークシヨップでは、被災経験者である住民の方々が参加し、意見を出し合いました。伊達市、壮瞥町、洞爺村の各小学校に配布されています。今後の災害に備えて、一番重要な事は、一人一人が日頃から身のまわりのチェックをし、近所とコミュニケーションを大切に、災害に関する知識を身に付けていく事ではないかと思えます。

「避難所」



体育館のなかも、風呂も食事の配給も、避難所はどこへ行くても

でも、ここだけは一人につき一人になれる。はやく来て。wc



- ◆ 異常気象：噴出した火山灰や火山ガスは、異常気象の原因となることがあります。
- ◆ 火山性津波：噴火によって海底や湖底の地形が急に変わると、津波が発生することがあります。